

論文

## 1960 年代～90 年代におけるロシア極東地域での日本語教育

——「日本語母語話者教師」として活動したロシア人の生涯から——

Japanese language education in the Russian Far East from the 1960s to the 1990s: In the view of Russian life which was active as a native Japanese language teacher

竹口智之\* ・ マフラコワ・アレクサンドラ\*\*  
TAKEGUCHI Tomoyuki, Makhrakova Alexandra

In this study, we studied the life of Mr. Sokolov Konstantin Konstantinovich, a Japanese language teacher from the 1960s to the 90s in the Russian Far East. In this regard, we obtained significant insights from our key informant, Ms. Q, who possesses detailed information about him. Mr. Konstantinovich, whose father was Japanese and mother Russian, was expected to play a role as a native Japanese language teacher at a university in Vladivostok. He then moved to Khabarovsk, and even after joining the radio station, he was expected to pronounce Japanese properly and express Japanese like native Japanese persons. In contrast, in the 90s, when the state system changed, he was expected to include his own enculturation and experiences in Japanese companies, as part of his course content. His life suggests that in Russian Far East, he represented his own origin and remained an active propagator of the Japanese language and culture throughout his lifetime.

キーワード：ロシア極東地域 (Russian Far East)、日本語教育史 (History of Japanese language education)、日本語母語話者教師 (Native Japanese language teacher)

### 1. 日本語教育史の課題点

日本語教育史研究は概観して以下の 2 点の課題があると思われる。

1 点目は以下の通りである。日本語教育史研究が対象とする時代区分は、1945 年以前と以後に分かたれる (関 1997)。戦前・戦中の日本語教育史研究は、公文書の分析や教材分析など (松永 2002、小川 2010 など) に重点が置かれている。一方で、このような類の研究は、日本語教育の当事者、特に現地教員や学習者がどのような目標や将来性を抱きながら学習を継続していたかについての省察は乏しい。

1945 年以降の日本語教育史研究は、公的機関からの発布のみならず、教師や学習者らによる視点も取り入れることで、当地や当地人にとっての日本語教育はいかなる意義があったかを分析している (本田 2012、田中 2015 年

ど)。現地の見解を取り入れた分析は、なぜ日本語教育が開始され、継続されているかを複眼的な視野で観察することにつながるであろう。

2 点目は地歴性の考察が十分とは言えないことである。一国を対象として、当該国の日本語教育史を分析する際、あたかも政策や決定が全国に限なく普及したかのような印象を与える。しかし現実的にそれは困難であり、地域によって教育事情の違いがあると予想される。このため調査区域を限定した上で日本語教育史を分析することは、当該地域の事情と日本との関連をより深く考察することにつながると思われる。

筆者 (竹口) が日本語教員として赴任したロシア極東地域 (以下極東地域) では、主要都市で日本語教育が行われている。ロシアで日本語教育が始められたのは 300 年前のサンクトペテルブルクにおいてである (ディボフスキー 2009)。しかし極東地域における日本語教育は、日

\* 大阪観光大学日本語別科/日本語教育 \*\* 太平洋国立大学教育学院・東洋語及び歴史学部/日本語教育

本との近接性から、首都モスクワやサンクトペテルブルクとは異なった日本語教育史を辿ったと考えるべきである。

極東地域も極めて広大な範囲にわたっているが、ここではまず、ウラジオストク市(沿海地方)、ハバロフスク市(ハバロフスク地方)の日本語教育について概況を述べる。日本語を学ぶ大学生を対象に、上記二都市とユジノサハリンスク市では持ち回りで日本語スピーチコンテストが開催され、上位入賞者はモスクワ国際学生日本語弁論大会に出場する<sup>1)</sup>。極東地域での上位入賞者は、モスクワ国際学生日本語弁論大会でも好成績を収めることから、当該地域・都市はロシア全体の日本語教育を牽引する地域であると言える。

ウラジオストク市の高等教育機関における日本語教育の開始経緯については、ディボフスキー(2009)に詳しい。この町では19世紀末に東洋学院で日本語教育が開始された。多くの優秀な学者、日本語話者を輩出したものの、1930年代の大テロル時代に閉鎖を余儀なくされている。その後、1956年に後続機関である極東国立大学(Дальневосточный государственный университет: ダールニューボストーチニー・ゴスダールストベニー・ユニベルシーテット。現在の極東連邦大学。以下ДВГУ: デー・ベー・ゲー・ウーと表記。)が開設されると、1962年に日本語科、中国語科を含む東洋学講座が再開された。ДВГУは日本語教育を推進する機関として再興されたが、その教育内容については不詳な点が多い。

また、ハバロフスク市の高等教育機関における日本語教育は、ハバロフスク国立教育大学(現在の太平洋国立大学。以下、教育大学)を中心に報告されている(国際交流基金2002)。しかしながら、その他の高等教育機関については記述が僅少である。そのため、教育大学以外の高等教育機関ではどのような日本語教育が実施されたかは、やはり不明である。

さらに、日本との行き来が極めて制限された時代(60年代以降の冷戦時代)から、国家体制が大きく変わった時代(90年代)まで、日本語を通してどのようなことが期待されたかは、ロシアの日本語教育史においてほとんど言及されていない。冒頭で述べた日本語教育史の課題と併せて考えると、今後は実際に日本語を教えた者(教師)、日本語を学んだ者(学習者)、もしくはこれらの関

係者の見解から、この点を分析する必要がある。

このため本稿は、ウラジオストク市、ハバロフスク市の日本語教育に従事したソコロフ・コンスタンチン・コンスタンチノビッチ氏(生没年1931年~2009年。以下ソコロフ氏)の生涯から、上記の都市における日本語教育史の解明を試みる。

ソコロフ氏に特化して論考する理由は、以下の点である。まず、ソコロフ氏が1960年代初頭にウラジオストク市で再開された日本語教育に担当した人物であることである。

次に、後で詳細に述べるように、ソコロフ氏の生い立ちと、それによる周囲の期待がやや特殊であったことである。ソコロフ氏の生涯を分析することは、氏の日本語への視座を分析することのみならず、当地・当代の日本語(教育)の関係者が日本語を通して何を実現しようとしていたかが部分的にでも明らかになると思われる。

## 2. 調査概要

まず、極東地域における日本語教育調査は、2018年9月から資料収集と関係者のインタビューから分析しようと試みた。後者についてはスノーボールサンプリング法で開始された。

執筆者の一人である竹口が国内外で様々な伝手を頼り、2019年の7月にハバロフスク市で日本語教育に従事しているマフラコワとメールで連絡が取れた。その後、竹口が研究意図をマフラコワに伝え、当地での日本語教育の歴史や状況を分析するために重要な人物を紹介してもらおうという手続きを取っている。

これらの手順を通して、2019年9月から2020年3月にかけて、ハバロフスク市の民間教育機関で日本語教育を開始した人物や、大学日本語教員、初中等教育機関での日本語教員とインタビュー調査が可能になった。

ソコロフ氏については、マフラコワが調査協力者を募っていたところ、氏の関係者であるQ氏が調査に協力してくれた。

Q氏はインタビュー(2020年3月)時点で50代後半の女性であり、ウラジオストク市生まれである。匿名性の保護の観点から、Q氏とソコロフ氏の詳細な関係については記述を控えるが、ソコロフ氏については写真や使



図-1 沿海地方、ハバロフスク地方略図 (安木 2009 : 2) より転載)

用教材など、詳細な情報を有していた。

このQ氏と竹口はインタビュー時において初対面である。インタビューは、竹口が予め準備した質問に答えてもらうという形式をとってはいるが、途中疑問に思ったことや確認したいことは適宜質問を追加した。竹口が日本語で質問し、Q氏はロシア語で、マフラコワが両者の通訳をするという形式で行われた。インタビューは調査協力者の許可を得た上で、録音した (120 分)。調査場所は、ハバロフスク市内の大学の一角を借りてインタビューを行った。データは文字起し後、MAX QDA によるコーディング (佐藤 2008) を行った。

### 3. 分析結果——ソコロフ氏の生涯

以下では氏の経歴を時系列に沿って説明する。また参考として、ソコロフ氏が生活を送っていた、沿海地方とハバロフスク市の地図を記載する (図-1)。

#### (1) 出生から日本への「帰国」まで

まず、ソコロフ氏の出生について述べる。氏は満洲国建国前であるハルビンで、1931年に生まれた。父親は日本軍人で、仕事の関係上でハルビンに出向いていた。母

親はロシア人だが、母親の家族は革命後の混乱を避けるために一家揃ってハルビンに移住している。ハルビンは当時多数のロシア人が集住しており(生田 2012)、様々な民族が集住する多民族都市であった。二人は現地で知り合い結婚をした。正確な年齢は聞くことができなかったが、小学生に上がる頃は既に父親は日本に帰国している。ただし、ソコロフ氏にとれば移住である。詳しい町名までは覚えていないが、東京の下町に移住したようである。日本ではソコロフ氏の父親は菓子屋を営んでいたという。

次にソコロフ氏の言語的資質について述べる。ソコロフ氏は幼少時から、露語能力が非常に高かった。ソコロフ氏は家庭内で露語でまず話していたという。これは恐らく氏の母親の教育方針によるものと思われる。また、ハルビンという多民族都市が、多言語使用を許容する場所であったとも考えられる。単に会話力があっただけではなく、文語レベルも非常に高かった。これは氏の母親が図書館で仕事をしており、非常に教養が高かったことによる。ロシアの教養を露語で教えていたため、露語能力が幼少時から高かった。日本に在住しているときからソコロフ氏は生活を共にするパートナーがいたが、このパートナーは神戸出身の日系ロシア人であった。Q氏によると、ソコロフ氏はこのパートナーよりも非常に高い露語能力を持っていたという。

その後、ソコロフ氏の両親は離婚する運びとなった。1956年まで日本に滞在したが、Q氏によると「自分たちはロシア人だ」という思いから、ソ連への帰郷を希望する。日本での最終学歴は高校卒業である 2)。

ソコロフ氏のソ連への移住は単独行動ではなかった。彼の移住は単に望郷心のみでなしえたものではなく、当時の社会的要因も影響している。ソコロフ氏は、両親が異なった国籍(日本とソ連)であるが、50年代当時、日本でこういった日系ロシア人がネットワークを作り、生活の様々な面で支えあっていたという。当時の日系ロシア人は、在住地に「～人」と付け、互い呼びあっていた。ソコロフ氏のように東京出身の者は「東京人」と呼ばれ、神戸出身のソコロフ氏のパートナーは「神戸人」と呼ばれていた。推測であるが、日本に在住しながらも、ある程度露語でコミュニケーションをしていたとも考えられる。

50年代は日本からソ連に帰ってきた日系ロシア人には優遇措置がとられていたが、これらの措置は、フルシチョフ時代だったからこそできたことであるとQ氏は述べている。

上記の日系ロシア人のネットワークはソ連移住後も続いていた。

## (2) ソ連への移住後——沿海地方にて

先述したように、ソコロフ氏の移住は集団によるものだった。ソ連移住に際し、東京のみならず、日本全国の日系ロシア人が一か所(場所は覚えていないという)に集合し、まずは新潟へ移動した。Q氏の証言によると、新潟からナホトカまで船で移動したという。ソコロフ氏だけではなく、日系ロシア人の多くがこの時期ソ連にわたっている。ソコロフ氏はパートナーとともに1956年に移住した 3)。

ナホトカ到着後、知人や親族、日系ロシア人の多くがアルチョーム(図-1中の「アルチョーム」)に住んでいたことから、ソコロフ氏のパートナーはアルチョームに移った。ソコロフ氏はアルチョームの隣にある小さな町でしばらく生活を送っていたが、その後すぐアルチョームで、パートナーと共同生活を始めている。氏の露語能力はもともと高かったため、ロシアに渡ってからも露語に困ることはほとんどなかった。その後、氏はアルチョームにある高等政党学校に入学・卒業をしている。この学校を卒業後、二人でウラジオストク市に、1961年頃引っ越した。

ウラジオストク市へ引っ越してから、ソコロフ氏は市内の夜間学校に通学している。恐らくこれは露語能力を証明し、ソ連社会で生活するためではなかったかとQ氏は述べている。その後、ウラジオストク市の「太平洋漁業大学」4)で仕事を始めた。ただし、ここでは教師の仕事ではない可能性もあるという。

ソコロフ氏が「日本語母語話者」教師としての活動が確認できるのは、ДВГУにおける1961年からである。当時のソ連でも、大学で教えるには大学卒でなければいけなかった。Q氏の話では、ソコロフ氏自身が大学卒ではないにもかかわらず、大学で教えることができたのは、日本語母語話者として仕事をしてきたからだという。

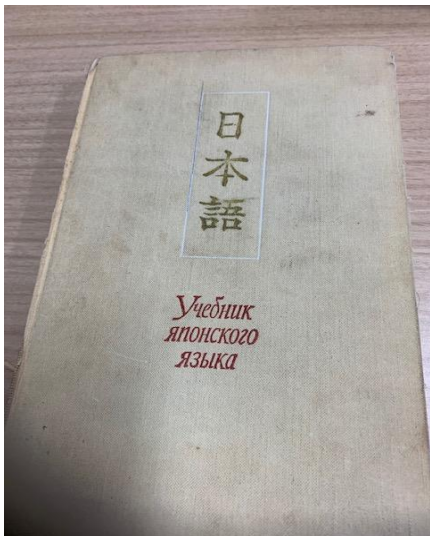


写真-1 учебник Японского Языка 初級

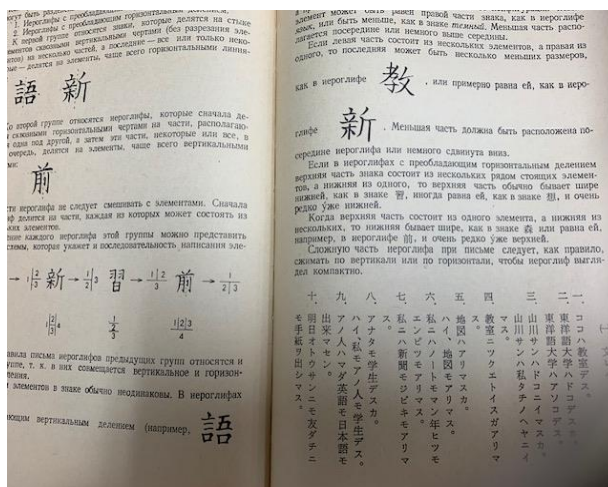


写真-2 учебник Японского Языка 初級の中身。

また、なぜソコロフ氏が日本語教師を生業としたかという筆者の質問に対し、Q氏は以下の2点を述べている。まず、氏にとって日本語は母語の一つであり、母語をずっと保護したいという気持ちが強かったからではないかということである。2点目は、母語(日本語)を通した自己実現を果たしたかったからではないかと述べていた。

ソコロフ氏がДВГУで教鞭をとっていたのは1965年までであるが、その後も折に触れて、日本語教科書の作成などにかかわっている。たとえば、極東地域全般で使用されていたのはゴロブニンが監修し、旧ソ連高等教育省が発刊した『Учебник Японского Языка 初級、1、2』の3冊であった(写真-1、2)。

この教科書が出版されたのは1971年~73年であるが、ハバロフスク市の高等教育(1991年頃)や、ユジノサハリンスク市での高等教育(1990年頃)でも使用されていたのが、筆者の聞き取り調査から確認されている。

ソコロフ氏はДВГУ退職後もこの教科書の会話の部分で日本人のパートを担当するなど、「日本語母語話者」として期待されている業務を担当している。

その後、いくつか職歴を重ねていくが、断続的にはあっても日本語教師としての業務に励行したことは、ソコロフ氏の日本語教育に対する関心がДВГУ退職後も続いていたことが窺える。

### (3) ハバロフスク市にて

ソコロフ氏は1965年にハバロフスク市に引っ越した。私生活においては、ハバロフスク市に引っ越しして数年後、事実婚であったパートナーと正式に婚姻し夫婦関係となっている。

このハバロフスク市への引っ越しは、市内にあるラジオ局から招待されたためであるという。このラジオ局はQ氏から聞いた住所から推察するに、「モスクワ放送ハバロフスク支局」だと思われる。

モスクワ放送は1929年に開始された海外向けの公式なラジオ放送であり、1942年には日本向け日本語番組の放送が開始された(島田2016)。

このハバロフスク支局における日本語放送については、極東、樺太、シベリア地域にいた日本人たちを引き入れる形で1946年12月に始まった(島田2018)。モスクワ放送は、日本人や朝鮮人がアナウンサーとして日本語で放送していたことが嶋田の一連の研究によって明らかにされている(島田2017b、2018)。ただし、嶋田の研究では日系ロシア人の存在については言及されていない。これは、資料等に記載されている制作スタッフ名がロシア名であったかもしれないため、「日系ロシア人」と認識されなかった可能性もある。

Q氏によると、ソコロフ氏は非常に堪能な日本語を話し、明朗な声を発していたため、アナウンサーとしてハ



バロフスク支局に勤務していたということである。放送内容についてはソ連国内のニュースや音楽が中心であったという。

島田の研究では、モスクワ放送において、アナウンサーと翻訳や放送内容の校正は分担されて行うことがほとんどのものである。しかしながら、Q 氏の話では、ソコロフ氏が教養が高かったことから、アナウンサーとしての仕事だけではなく、通訳の仕事も徐々に請け負うようになったという。島田 (2017a) によると、1944 年にモスクワ放送側が挙げた改善点のうちの 1 つが違和感のない日本語で放送することであった。この点について東京育ちのソコロフ氏は適任であったといえる。その後もソコロフ氏は、高い信頼を得るようになり、モスクワから送られる政治関連の書類の翻訳、さらには地方政府団体レベルの同時通訳の仕事も依頼されるようになったという。

ラジオ局以外にも様々な業務を請け負っていた。まず、前述したように、日本語の教科書作成にも携わっていた。Q 氏も ДВГУ に在籍し、グローブニンの教科書を使用していたが、Q 氏の在学時 (1970 年代後半ごろ) には、すでにソコロフ氏による音声教材があったという。

さらにビジネス面においても活躍ぶりを見せていた。60 年代の後半ごろから、ハバロフスク市では毎年日本の製品を展示するイベントフェアが行われていた。日ソ交流が極めて限定的だった時代状況を鑑みると、「日本」を知る希少な機会であったと思われるが、ソコロフ氏はフェアの通訳として、パートナーとともに活動していたという。

このラジオ局には長年にわたって勤務していたが、1988 年に退職している。ラジオ局にはソコロフ氏以外にも多くの日系ロシア人が在職しており、プライベートで会合したり、宴席等を開いたりしていたという。充実ぶりがうかがえるラジオ局時代であったがラジオ局退職の経緯について詳しいことはわかっていない。

ソコロフ氏はラジオ局退職後、神戸に本社がある日系企業で働くようになった。日系企業に入社した経緯はやはり不詳であるが、この頃は、日系企業、もしくは合弁企業の極東地域進出が目立っていた。ここでもソコロフ氏は通訳・翻訳業に励んでいたが、ハバロフスク市内だけではなく、上司がモスクワに出張した際、ほぼソコロフ氏が同伴していたという。また、企業による環境保全

への取り組みなど大きなプロジェクトの通訳も担当していた。

80 年代末期から 90 年代初頭は、外資系企業が極東地域、ハバロフスク市に進出しただけでなく、教育面においても、日本や日本語教育の関心が高まった時期だといえる。1990 年代に、ハバロフスク市では、主専攻・副専攻を含め、6 つの大学で日本語が教えられるようになった (国際交流基金 2006)。そのうちの 하나가、モスクワ消費者協同組合大学極東分校 (以下極東分校) である。

この極東分校は、ロシアで著名な教育心理学者であるミハイル・ニコライビッチ・ネフゾーロフ氏 (以下ネフゾーロフ氏) が学長を務めており、Q 氏によると 1990 年に設立された学校であるという。極東分校の教育指針は、新しい時代を作るビジネスマンを育成することであった。折しも、ソ連が新思考外交路線を打ち出して数年後の設立であり、そのような歴史的、社会的背景も教育指針の策定に影響していると思われる。

極東分校においては日本語のほか、中国語、韓国語、英語など、冷戦時代において対立していた国の言語が教えられていた。到達目標としては対象言語で商談交渉ができるようなレベルに持っていくことだったという。

極東分校における日本語科の設置は以下の経緯を辿る。Q 氏はこの頃、上記の極東分校と同じ教育グループで仕事をしており、役職にも就いていた。Q 氏の妹さんが、ちょうどその頃、高校卒業前であり、次にどこに進学させようか考えていた。最終的に Q 氏は、妹さんを自身が所属する教育グループの専門学校に進学させようと思ひ、ネフゾーロフ学長と相談を始めた。話が進むうちに、Q 氏の知人であるソコロフ氏の話となった。ネフゾーロフ氏は Q 氏との相談後、ソコロフ氏を学校の教員として採用したくなったという。それが、極東分校がソコロフ氏を招聘するきっかけとなった。

極東分校は設立当初は日本語の授業はなかったものの、ソコロフ氏の赴任により、92 年から日本語の授業が開始された。極東分校の日本語開始年度についての Q 氏による証言は、国際交流基金の報告書 (2002) と合致している。

ソコロフ氏は日本語を教えるのみならず、商業科の学部長として、仕事を開始した。ここで氏は、ДВГУ のように会話のみならず、文法、漢字など、日本語全般の教

育を担当していた。ラジオ局時代は様々な兼業にも従事していたが、年齢的なこともあり、極東分校の他には家庭教師をする以外に特にこなすことはなかったという。

また、国際交流基金 (2006) の調査報告書では、この極東分校には、留学・交流プログラムは設置されていないと記されている。しかしながら Q 氏の話では、ソコロフ氏は大学で日本留学のコーディネーターも行い、学生を引率して日本への留学も実施している。留学先としては、姉妹都市である新潟市にある国立大学や、ロシア語教育が実施されている日本の有名私立大学だったという。Q 氏によると、この留学のコーディネーター、引率はソコロフ氏にとって非常に充実したものであったようであり、「楽しい時期であった」ことを回想している。ソコロフ氏はウラジオストク市でも教育活動にあっていたが、Q 氏から「楽しい」という言葉が出たのは、ハバロフスク市での教育活動であった。

ただし、この有意義な時間は長くは続かなかった。赴任して 3~4 年目である 1994 年頃に、脳卒中を起こし、在任最後の 1 年はほとんど業務を遂行することができず、そのまま退職している。国際交流基金 (2006) の報告書で、極東分校の留学・交流プログラムの記載がないのも、留学コーディネーターの中心人物と思われるソコロフ氏の退職が影響している可能性もある。

#### 4. 考察

以上ソコロフ氏の生涯を、日本語教育との関連から述べた。以下では (1) 年代ごとに極東地域が日本語を通してどのようなことを期待していたか、(2) ソコロフ氏がソ連・ロシア社会において、自身の日本らしさをどのように評価し、活用していたかを述べたい。

1950 年代のウラジオストク市は、当時軍港として閉鎖都市であり、外国人はもちろんのこと、同国人にも入居が極めて制限されていた<sup>5)</sup>。そのような中、日本からウラジオストク市に移住し、さらに高等教育機関で日本語を指導するに至っている。これは、ソコロフ氏の自己実現という個人的な願望だけでは説明が難しい。詳しい理由については、公文書の分析も踏まえて考えなければならないが、差し当たって以下のように考えている。Q 氏が「フルシチョフ時代だったからこそ可能であった」と

述べていたように、この頃は戦後途絶えていた日ソの外交関係を構築していこうとする時期でもあった。国交回復には抑留していた日本人捕虜も帰還させることが重要であり、彼らをソ連に残して日本語教員として活用するのは対外的にも印象が好ましいものではなかったと思われる。ただし、二国間の外交ルートが成立した際には、限定的ではあっても相互の経済開発も志向しており、当然高い日本語力を持った人材が必要になっただろう。このため、ソ連に渡航する「母語話者」は貴重な人材であり、入港が許可される対象として重用されたのではないだろうか。

また ДВГУ における教授法について挙げられる特徴は、音声の母語話者志向である。別種の調査で 80 年代に ДВГУ で日本語を学んだ学生の調査でも日系ロシア人が指導にあっていたことを述べていた。このことから「母語話者に少しでも近づけるのが、より正確性の高い外国語につながる」という考えが、当時の ДВГУ にあったと推測される。

その後、60 年代半ばにモスクワ放送ハバロフスク支局に転職した。アナウンサーとしての役割を与えられたことは、放送局の課題として挙げられていた「地方訛りのない標準語で話すこと」が期待されていたと思われる。また、単なるアナウンサーとしてではなく、翻訳・通訳でも活躍できた。より自然な日本語表現で放送することもモスクワ放送での課題として挙がっていた (島田 2017a) が、この点でもソコロフ氏は期待に応える能力を持っていたと思われる。

90 年代のハバロフスク市における日本語教育は以下のように考察する。この時代において、旧態の体制や価値観が大きく変化する中、ソコロフ氏も自身のやりたい教育活動に身を投じることができたのではないだろうか。それまでの国立大学教員や国営ラジオ放送局などの公的な職場から、私立大学という比較的自由度の利く場所に活動の場を変えている。ここでは、「日本語母語話者」としての役割も期待されていただろうが、何より、ソコロフ氏に求められていたのは、高い教養の伝授と日系企業での職務経験であろう。ウラジオストク市における期待感が「ほぼ母語話者に近い言語能力」というのであれば、ハバロフスク市における期待感は「日系企業参入を促すべく、日本語が使えるビジネスマンを育成する」

ことではなかつたらうか。

次に (2) について述べる。ソコロフ氏はソ連に移住後も自身と同じような出自の者とネットワークを形成しており、移住後の生活も日本語に関連することがほとんどであった。このことから、自身の出自に思い悩んだ可能性は大きくないと思われる。

また、Q 氏の話によると、ソコロフ氏は自身の子どもにも ДВГУ で日本語を勉強させ、何とか身につけさせようとしていたという。さらに、夫婦そろって子どもには日本の礼儀なども教えていた。ソコロフ氏の妻は料理が大変上手であったが、日本料理も頻繁に作り、Q 氏もよくご馳走になっていたという。日本との行き来がほぼ自由になってから、ソコロフ氏は Q 氏を連れて自分が育った東京の街を訪れ、往時を述懐していたということである。

これらのことを鑑みると、ソ連、ロシア社会における自身の出自の希少性をアイコンとして極東地域で活用していたといえるだろう。また、確かに日本語はソコロフ氏にとって生きるための武器であったとも言える。しかしながら生活手段として日本語を活用し続けたからこそ、90 年代以降は日露関係の構築に勤しみ、日本をルーツの一つとして認識し続けたと考えられる。

今後の課題としては以下のことが考えられる。一点目はソコロフ氏の具体的な教授法である。Q 氏の話から、60 年代初頭の会話教育が母語話者志向であることが窺えたが、実際にソコロフ氏がどのような教育方法を用いていたかは不明である。ソコロフ氏の指導法がどのようなものであったかを分析することは、就学期含めた氏の教育背景や教育理念を詳しく明らかにすることができるであろう。Q 氏からソコロフ氏の教え子を紹介してもらったため、これらの関係者から情報を得ることが必要となる。

もう一点の課題は、ソコロフ氏の折々における人生の岐路の経緯である。例として挙げられるのは、まずソ連への移住のより詳細な経緯である。戦後日系ロシア人が招聘・優遇されたという文献は見当たらず、これら日系ロシア人が沿海地方に移住した要因をさらに分析しなければならない。次に考えるべき分岐点は、充実したラジオ局在職時代から、民間の日本企業への転職である。

これらの点を分析することで、当時の極東地域におい

て、日系ロシア人や日本語がどのような期待をされていたかが明らかにできると思われる。

#### 【謝辞】

この研究は文部科学省の基盤研究 C(研究課題: 18K00726)「ロシア極東地域における日本語教育の歴史的背景と現状に関する基礎的研究(研究代表者: 竹口智之)」を受けて実施することができました。この研究への調査協力者の方(論文中における Q 氏)と、国際交流基金派遣専門家の下郡健志先生(極東連邦大学)には大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

#### 【補注】

- 1 出場学生については、マガダン州やサハ共和国、ブリヤート共和国などからの学生も出場している。
- 2 帰国後、当時の日本の学校でどのような教育を受けたかは不明である。
- 3 日ソ共同宣言により、日本とソ連の国交が回復したのは 1956 年のことであるが、その後もしばらく日ソ間での行き来は制限されている。このため、ソコロフ氏の移住が定期便なのか、特別に許可された航路なのかは不明である。
- 4 Q 氏のロシア語を直訳すると、このようになるが、正式な名称かどうかは定かではない。
- 5 ウラジオストク市は 1952 年には軍事上の理由から閉鎖都市となり、同国人に門戸が開放されたのは 1991 年、外国人が訪問できるようになったのは 1992 年である(在ウラジオストク日本国領事館 2014)。

#### 【引用・参考文献】

- 生田美智子編(2012)『満洲の中のロシア——境界の流動性と人的ネットワーク』成文社
- 小川誉子美(2010)『欧州における戦前の日本語講座——実態と背景』風間書房
- 国際交流基金(2002)『日本語教育国別事情調査 ロシア・NIS 諸国日本語事情』国際交流基金
- 国際交流基金(2006)『日本語教育国別事情調査 ロシア・NIS 諸国日本語事情: ロシア連邦 ハバロフスク地方(ハバロフスク)』国際交流基金
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法——原理・方法・実践』新曜社
- 島田顕(2016)「第二次世界大戦中のモスクワ放送——モスクワ



からの日本語放送はいかにして開始されたのか——』『アジア太平洋討究』第 27 号, 早稲田大学アジア太平洋研究センター, pp.125-134.

島田顕 (2017a) 「開始当初のモスクワ放送日本語番組——放送内容と批判——」『アジア太平洋討究』第 28 号, 早稲田大学アジア太平洋研究センター, pp.211-224.

島田顕 (2017b) 「キム・ギウン——知られざる戦時中のモスクワ放送日本語番組の朝鮮人スタッフ」『アジア太平洋討究』第 29 号, 早稲田大学アジア太平洋研究センター, pp.71-83.

島田顕 (2018) 「石坂幸子とモスクワ放送——元 NHK 女子アナウンサーが見た戦後直後のハバロフスク放送局日本語放送——」『アジア太平洋討究』第 33 号, 早稲田大学アジア太平洋研究センター, pp.91-87.

関正昭 (1997) 『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク

田中祐輔 (2015) 『現代中国の日本語教育史: 大学専攻教育と教科書をめぐって』国書刊行会

ディボフスキー・A (2009) 「極東ロシアにおける日本研究と日本語教育の行方: 東洋学院 (1899-1920) の日本学を中心に」『言語文化研究』第 35 巻, 大阪大学大学院言語文化研究科. pp.95-117.

本田弘之 (2012) 『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房

松永典子 (2002) 『日本軍政下のマラヤにおける日本語教育』風間書房

安木新一郎 (2009) 『ロシア極東ビジネス事情』東洋書店

ルイービン・B (2006) 「サンクト・ペテルブルグ (ロシア) における日本語学習と日本研究の 300 年のあゆみ」『日本研究: 国際日本文化研究センター紀要』第 32 巻, 国際日本文化研究センター, pp.261-284.